

憶良を読む

——六朝士大夫と憶良——

一 はじめに

憶良の文学の特異性とは、何よりもその思想の問題にあるように思われる。憶良の作品を覆う思想は、万葉集が一般にもつ思想・感情に基づくものであるよりも、それは常に外来の典拠をもつものである。その典拠に支えられることで憶良の独自の文学が形成されているということであり、このような方法は、ある意味では文学が思想をモデルとすることで新しい表現を可能にしていることを示唆している。むしろ、憶良は積極的に外来の思想をモデルとすることで文学表現にかかわった作家であったといえるだろう。そして、この憶良にみる思想とは、中国の六朝思想に他ならないのである。それゆえ、この六朝思想が憶良を読むための当面の暫定的なモデルとし

辰 巳 正 明

て可能であると思われる。

ここに言う六朝思想とは、およそ呉・晋・宋・齊・梁・陳の六国時代を特徴づける思想を指すが、魏から隋までを指す場合もあり、あるいは魏晋南北朝時代と呼ばれる時代区分をも含めてこの時代に隆盛をみた思想形態である。その思想のあり方は儒・仏・道および老荘の思想が混然と取り込まれていて、きわめて複雑な様相を呈していた。

かかる思想が中国の六朝文学を彩ったのであるが、憶良の作歌時期である奈良朝初頭はすでに盛唐の玄宗皇帝の時代にあつたが、憶良はあきらかに六朝思想の中にあつて文学表現を試みたのである。ここに、憶良文学の特異性を説明できる一つの理由が見出せるのである。

二 憶良と六朝思想

憶良の作品には儒教・仏教・道教（および老荘）の思想が特徴的に現われている。これは六朝思想が儒仏道および老荘思想を混然ともっていたことと重なる問題であろう。憶良の作品の中からそれらの特徴的な思想の現れを見てみよう。

まず儒教思想は次のように見える。「惑える情を反さしむるの歌」（巻五・八〇〇―⁽²⁾）の漢文序によると、ある人があつて父母を敬うことは知っていたが侍養を忘れており、妻子を顧みずに脱ぎ捨てた杳よりも軽んじていたという。その人は倍俗先生（あるいは異俗先生）と呼ばれているのだが、この先生に憶良は「三綱を指示」し、さらに「五教を開く」のだという。そして、その歌において「父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世の中は かくぞ道理」と詠むのである。三綱は君臣・父子・夫婦の教えであり、五教は父義・母慈・兄友・弟恭・子孝の教えであるから、いずれも儒教の重要な倫理思想である。また、青年大伴熊凝が上京の折に病を得て死に臨むという時に詠んだという「敬みて熊凝の為に其の志を述べたる歌に和へたる六首」（巻五・八八六―九二）の漢文序では、熊凝が自らの死を顧みずに年老いた父母

に對して「一の身の死に向ふの途を患へず。唯し二の親の生に在す苦しみを悲しむ。」と述べている。その歌では「一世には二遍見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ」（八九一）という。ここに父母に先立って死ぬ熊凝の父母への嘆きが捉えられているが、そうした熊凝の立場はあきらかに子孝にあることは言うまでもないであろう。

仏教に関する思想は憶良の作品に特徴的に現われる。ことに憶良文学の出発ともいふべき大伴旅人の妻の死を追悼したと考えられる悼亡詩文は「蓋し聞く、四生の起き滅ぶることは夢の皆空しきが方く、三界の漂ひ流るることは環の息まぬが喩し」とその生の無常を説く。あるいは子どもを思う「子らを思へる歌」（巻五・八〇二―三）の漢文序では、釈迦の言葉であるとして「等しく衆生を思ふことは、羅睺羅の如し」「愛びは子に過ぎたるは無し」と説いて子への思いを歌う。また、「世間の住り難きを哀しびたる歌」（巻五・八〇四―五）では、その漢文序に「集ひ易く排ひ難きは八大の辛苦にして、遂げ難く尽し易きは百年の賞楽なり」といって二毛の嘆きを払おうとするが、むしろ老醜の苦しみを嘆くことを歌うのである。こうした憶良の仏教思想の取り込みの中でも、殊のほか「俗の道の、仮に合ひ即ち離れ、去り易く留まり難きを悲しび嘆ける詩一首併せて序」は深く仏教思想に彩

られており、晩年の憶良の心境を考えるには重要な作品であろう。この序文では、仏教の教えと儒教の教えは異なるものの、悟りを得るのは一つだという理解を示す。しかし、人には決った生涯など無く一生も瞬時にして過ぎて死を迎えることから人の世の無常に触れ、「内教に曰はく」（涅槃經の引用）として「黒闇の後に来るを欲はずは、徳天の先に至るにすること莫かれ」（徳天は生、黒闇は死）を引用して、それゆえ生まれれば必ず死があり、死がいやなら生まれないのが良いのだというのである。

そして、その詩においては「俗道の変化は猶ほ目を撃つが如く、人事の経紀は臂を申ぶるが如し。空しく浮雲と大虚を行き、心力共に尽きて寄る所なし」と詠むのである。こうした憶良の仏教に関する思想は、その作品の主題とする所へもはっきり現われている。すなわち、生・老・病・死・貧・愛別離などが、これらはいずれも仏教の説く苦（八相あるいは八大辛苦の世界であった。そうした苦の世界を作品の主題とすることによって、憶良の特異性が現われて来ていることも事実であろう。

次に道教思想については、これが老荘思想とも深くかわるところから便宜的の一つにして見ておきたい。まず最初に現われるのは、先に掲げた「惑へる情を反さしむるの歌」に見える「倍俗先生」である。この先生は意

気は青雲の上に揚るとはいつても、身体は塵俗の中にあり、しかも、まだ道を修め得ず聖人としての効果を現わしていないという。そこでこの先生を「山沢亡命の民」なのだろうとする。この倍俗先生の「倍俗」（あるいは「異俗」とも）は、世間に背くという意味であるように、世間を捨てて山中に逃れる隠逸者を指すものと思われる。それを憶良は山沢亡命の民と呼んだのだが、それは現実的には逃亡農民などをそこに重ねているのであろう。しかし、倍俗先生などというところからも、ここには『淮南子』に見る「単豹は世を倍き俗を離れ、巖居谷飲し、糸麻に依らず、五穀を食さず、行年七十、猶童子の顔色あり。」（人間訓）のような者を指していると考えられよう。世間を捨てて山中に逃れる者が倍俗先生であり、その先生の生き方の中に老荘思想を見ることができよう。

なお、「山沢亡命の民」については史書の記すところであるが、その中でも注目すべき記事に「勅すらく。内外文武の官及び天下の百姓、異端を学習し幻術を蓄積し、丘魅呪咀して百物を害ひ傷る者有らば、首は斬し従は流せん。もし山林に停住し詳って仏法を道ひ自ずから教化を作して伝習して業を授けて、書符を封印し、薬を合せ毒を造り、万方恠を作し、勅禁を違反する者有らば、罪亦此のごとならん。其の妖詛の書は、勅出でて以後五十

日の内首し訖。若し限の内に首せず後に糺告せらるる有らば、首従を問わず皆威に配流せん。」(『続日本紀』天平元年四月)のようにあるのは、倍俗先生の性格を十分に語るものである。ここに見られる異端・幻術・圧魅呪咀・仏法・薬(毒)・妖訛の書などは、いずれも道教的なものを暗示する。憶良はあえて山沢亡命の民を逃亡農民に重ねてはいるが、かかる異端の徒は憶良がこの作品を作った時代の現実的側面として存在したことを語っているのである。

さらに憶良は「沈痾自哀文」において病の苦しみと長生を願うことを書き記すが、ここには医学に関する深い知識が散見する。この医学に関する知識は、病を除くために祈禱するのだが少しも効験なく、憶良の知り得た知識をもって中国の名医について記すところに見られるが、これはおそらく道教との関係から記されたものであると思われる。この名医の中に葛稚川(葛洪)、陶隱居(弘景)の名が見え、葛洪は神仙の書『抱朴子』『神仙伝』の著者であり(『晋書』七十二)、弘景は葛洪の『神仙伝』の影響を受けて、神仙・養生の道に励んだ(『梁書』五十二)といわれる。憶良も自哀文の中で『抱朴子』の「人はただ、その当に死なむ日を知らぬ故に憂へぬのみ。若し誠に則削して期を延ぶるを得べきを知らば、必ず將に之を

為さむ」を引用している。その他に自哀文に見える『帛公略説』も神仙の書と考えられるし、『遊仙窟』は張文成の仙界に遊ぶ小説である。

こうした憶良の作品に現われる儒仏道および老荘の思想は、それぞれが単独に現われる場合もあり、またそれぞれが混然と現われる場合もある。これらの思想が混然と存在する作品で注目されるのは、「沈痾自哀文」である。憶良は生まれてから今日に至るまで「みづから修善の志しあり、曾て作惡の心無し」という。そこで憶良は「三宝を礼拝して、日として勤めざるは無く、(日毎に誦經し、發露懺悔するなり)百神を敬重して、夜として闕きたるは鮮し。(天地の諸神を敬拝することを謂ふ)」と述べているが、三宝は仏教の仏・法・僧であり、百神は天地の諸神であると注を加えているように、古代中国の天神地祇を指していると思われる。さらに道教の神々をも指していると考えられる。こうして憶良は三宝を礼拝し百神を敬拝するが、しかし、重い病にかかり患い嘆くことになり、中国の名医の名を列挙したり『抱朴子』『帛公略説』といった道教・老荘の書物から生の意味を問うのであった。さらに、「惑へる情を反さしむるの歌」の序文も儒仏道の混在した作品であるといえる。三綱・五教は儒教のそれであるが、山沢亡命の民は世間を捨てた老荘的隠

逸の面影を見せていた。だが歴史書によれば、彼らは「軍器」（慶雲四年七月）「禁書」（和銅元年一月）を隠し持ち、そして「異端」を学習（天平元年四月）する者たちであった。殊に天平元年四月の記事には「山林に停住し詳つて仏法を道ひ、自ずから教化を作して業を授け」とあつて、彼らは山林に入り「仏法」をも伝授していたというところに、山沢亡命の民は単に老荘的な隱逸者と考えられないものである。憶良も倍俗先生が修業得道の聖となることを願っていたという。そこには道教の取り込んだ仏教の影も窺えるのではないか。

むしろ、問題はどのように憶良の作品の全体が儒教・仏教・道教および老荘の思想によつて覆われているということであろう。すでに先に見たように、このような思想の情況はまさに六朝時代の思想の情況でもあつた。そうした六朝思想の情況をみごとに取り込むことで作品の形成を成し遂げた憶良の文学は、他の万葉集の作品から孤立した数少ない存在となつた。そこに、憶良の作品の特異性を見出すことが出来るということである。

しかし、それ自体は憶良の取り込んだ思想（六朝思想）の問題であつて、文学の問題ではないと言える。憶良はなぜかかる思想をもつて自らの作品の形成に向つたのか。先に憶良を読むための暫定的モデルとして思想の問題を

想定したが、憶良の新たな文学の形成を可能としているのは、モデルとして提起された六朝思想にあつたと思われることである。

ここに考えられるのは、六朝時代の思想情況の中でその思想にかかわつた知識人たちの生き方への問いである。儒仏道（および老荘）という複雑な六朝時代の思想情況の中で、彼らはどのような生き方を求めたのか。その問いの中に憶良自身の生き方や、そしてその作品を解く問題が隠されているように思われるのである。

あらためて憶良の作品に目を注いでみよう。憶良の作品が六朝思想をみごとに取り込んでいることはすでに見たとおりだが、ここにもう一つの憶良のとらえた思想の問題がある。それは憶良が儒教と仏教との関係について次のように述べていることについてである。

竊に以るに、釈・慈の示教は釈氏、慈氏を謂ふ先に三婦（仏法僧に婦衣するを謂ふ）五戒を開きて、法界を化し、（一）に殺生せず、二に偷盜せず、三に邪淫せず、四に妄語せず、五に飲酒せぬことを謂ふ）周・孔の垂訓は前に三綱（君臣・父子・夫婦を謂ふ）五教を張りて、邦国を濟ふ。（父は義に、母は慈に、兄は友に、弟は順に、子は孝なるを謂ふ）故知る、引導は二つなれども悟を得るは惟一つなるを。（俗の道の、仮に合ひ即ち離れ、

去り易く留まり難きを悲しび嘆ける詩一首并せて序)

ここに憶良は、「三綱」「五教」と「三婦」「五戒」という儒教の教えと仏教の教えについて触れ、この教えは二つのものではあるものの、その教えによって「悟り」を得るのは一つであると主張するのである。憶良がこのように主張するのも、憶良の思考過程を明らかにするものだが、このような思考も実はきわめて六朝思想風である。これは儒教と仏教の一致を示唆するものであって、それは憶良の生き方の問題をも包み込んでいたといえるのである。

憶良がこうした儒仏一致を主張するのは、それ自体憶良という一人の人間の立場を明らかにするものだが、一方に憶良にかかる立場を取らせている思想の情況も軽視できない。六朝時代はまた儒・仏論争の時代でもあり、それが六朝思想を特徴づけたことも事実である。ここに、六朝時代のかかる論争の中に生きた知識人たちの生き方が大きく問題となるに違いない。彼らはまさに六朝時代の「士大夫」⁽³⁾であり、それを体現した知識人たちであったからである。

三 捨身と慚愧

憶良をこのように導く思想は、もちろん六朝思想にお

いて現われたものだが、しかし、それがこの時代の中心となる思想ということではない。なぜなら、六朝時代は先にも示したように儒仏道および老莊思想の混然とした時代であったが、さらに范縝の「神滅論」に代表されるように、中国の伝統思想を重んじる道家思想側の反仏教論があり、それに対する仏教擁護者からの反論(例えば「神不滅論」「難茫續神滅論」など)があるように、激しい対立と論争の繰り返された時代でもあった。このような中に儒・仏一致や道・仏一致を説く論が登場するのである。憶良の説いた儒・仏一致もすでに陶弘景に見られるように、道家側からの儒仏道の三教一致が説かれており、また顔子推は「家訓帰心篇」という論文で仏教の五戒と儒教の五常とを比較して「仁は不殺の禁、義は不盜の禁、礼は不邪の禁、智は不酒の禁、信は不妄の禁」(『広弘明集』巻三)のような儒仏一致を説くのである。さらに、敦煌から発掘された『父母恩重経』は、道教側にも『太上真一報父母恩重経』『太上老君説報父母恩重経』などが存在することによっても、道・仏両者の歩み寄りも現実的に行われていたことが知られる。⁽⁴⁾

六朝思想はこのようにそれぞれの思想が対立し論争し、そして合一するという複雑な情況にあったのだが、それはまた当時の「士大夫」の生き方を示す問題でもあった

のである。憶良を考えるにおいても、憶良がかかる六朝時代の士大夫の生き方と呼応する性格を多くもっていることをまず確認しておかなければならない。

ここに、六朝時代に生きた士大夫を取り上げ、その思想と生き方を考えてみたい。その一人は梁の時代を代表する沈約（沈休文）である。その沈約に「捨身願疏」がある。

優婆塞沈君敬いて十方三世諸仏、本師釈迦如来、安養陀弥陀世尊云々、一切衆聖、今日道俗諸大賢徳に白す。それ形は定質に非ず。衆縁聚る所なり。四徴は同じからず。風火亦異とす。析て之を離すに本より一物に非ず。燕肝越胆も未だ譬となすに足らず。静かに念じ我を求むるに、時として得べきことなし。而してこの淪昏を積み生生として已まず。一念儻に値うも、曾って未だ時を移さず障習相蕩す。旋迷して路を厥う。横指して空呼するに、これを名づけて有となす。

己を豊にして物を傷い、日夜休むこと靡し。身外の財を蓄えて、以てその慾に充て、己に非ざるの分を攘り、用って其の侈を成す。豈直に肌を温め腹に啗す。かくのごとくして已んや。篋に積み蔵に盈つるに至りて、未だ嘗って体に登らず。俎に溢れ庖に充

つるも、既に飫て斯れを棄つる。曾って粟帛の従う所、事は己に因るに非ず。悠悠たる黔首、同じく其の分を有することを知らざるなり。多くを離し寡きを共にするは、なおあるいは未だ均しからざるに、我もし余り有らば物何ぞ足るに由あらんや。仁者の懐はかくのごとくに応わず。他の財を侵すは、世称して盗となす。盗の甚だしきは孰ぞ斯れに過ぎんや。幽頭推求するに一としてあるいは可なし。仰ぎて時を藉き来り、久しく休運に乗り、玉粒晨炊し、華燭夜炳かす。これにより今に迄ること歴年三十年。遂にすなわち晁を服し国に榮あり、裂土家を承く。身己に潤盈し、僕妄に慶流す。室は懸磬に非ず、俸は兼金あり。寒を救うに重裘すれば止むも、而して筒には余襲を委て、冬夜既に累匱を蒙り、而して襜には羸衾あり。斯れより已上、侈長は一に非ず。彼の豪家に等しと雖ども、其の陋は己に甚だし。諸寢室に方ぶるに、邁るところ実に多し。

此の常に非ざる事は諸仏に因るを悟り、懐に捨散あり。宜しく道場を光すべし。饑寒困苦、患の切なるをなすこと、州県に布満す。悉く経縁をなすことは難し。まさに力を称りて事に因るべし。一旦年に隨う。頭目髓腦、誠に輕慕すること難し。己を虧きて

物を贖るに頓行し易からず。広く深恩を念じ、微を積み著を成さんことを誓う。『広弘明集』卷三十五)

沈約は「静かに念じ我を求むるに、時として得べきことなし。」という。「我」という存在を求めても、いつも「我」を求めることができないといい、不安のみが積み重なり生々として止まず、瞬時に「我」を見出したとしても、たちまちに煩惱に乱されて道を失うのであるという。ここには、沈約が深く自己を省察しその存在を求めても得られない苦しみが吐露され、「捨身」への願いを明らかにする姿がある。

つづいて沈約は、貴族社会に身を置く官人として、また読書人としての自己を深く反省する。すなわち、自分を豊かにするために物をむだにして日ごと繰り返し、余分な財産を蓄えて自己の欲望に充て、自分のものではないものまで手に入れて贅沢をし、さらに、肌を暖め腹を満腹にしても、そのみでは止どまることはないという。衣腹は着ることもないままに箱や蔵に満ちあふれ、食べ物にはまな板や厨房に満ちていても食べ飽きて捨ててしまう。こうした食べ物や着る物は自分が作るのではなく、貧しい人々の作るものであるが、彼らがそれらを自分のものとは出来ないことを知らずにいるのである。多くを取ってから少ない部分を配分するのでさえ等しくないの

に、自分にもし余りがあれば、外はどうして足りることがあるかと深く反省するのである。かつて仁者の心はこうではなかったこと、他人の財産を侵すのは世間では泥棒と呼んでおり、泥棒の中でも甚だしいのは既述のようなものであり、いろいろ考えるが一つとして許されるものは無いのだとして、自分は幸運な生活が出来て今に至ること三十年、役人として国に仕え、おかげで生活を贅沢にし使用人にまで幸運がおよび、給与も十分であり、寒さも重ね着すれば済むのに箆筒には衣服があり余り、冬の夜は絹の布団を掛け、箱に衣類が満ちているといつて反省する。この贅沢は一つに止どまらず、物惜しみはひどく、貧家に比べるとその豊かさは大変なものであるというのである。

沈約は、こうした個人の富は決して当り前のものではなく、「仏」のお蔭なのだと悟るのである。そこで捨散のために道場を輝かすことになるのである。ただ、飢えや寒さに苦しむ者は国中に満ちていて、それらの救済は困難であるから、まずは自分の出来ることから少しずつやるとしても、頭目髓脳まで捨てることは出来ないし、自分の物を削って施すことも実行し難いから、広く仏の恩を念じながら、少しずつ積み重ねて効果を期待したいということ誓うのであった。

これは、沈約が「我」の存在について深く反省する中から導かれた〈懺悔〉の内容である。「我」の存在を問い、自己を深く省察する中から他者を見出し、自己のあり方を問うのである。謂わば、ここには自己省察―懺悔―捨身という図式があり、そこに六朝士大夫の自己追及の態度があると考えられる。

また、沈約には「均聖論」(『広弘明集』巻五)があり、ここでは周孔と釈迦との〈慈悲〉の等しいことを説いて「内聖と外聖は義均しくして、理は一なり。」とのべ、生き物への慈悲を通して過去に自らの犯した「罪」を〈懺悔〉するのである。さらに沈約には「究竟慈悲論」(『広弘明集』巻二十六)や「懺悔文」(『広弘明集』巻三十六)もあり、沈約の精神生活の中に「慈悲」や「懺悔」が深く存在したことが窺える。

この〈懺悔〉を徹底して説いた六朝士大夫が齊の蕭子良であった。蕭子良は『淨住子淨行法門』(『広弘明集』巻三十三)で「滅苦の要は懺悔に過ぐる莫し。懺悔の法は先ず当にその心を潔にし、その慮を静め、その形を端しくし、その貌を整え、その身を恭しくし、その容を肅にし、内に慚愧を懐い、外発するを鄙恥す。」(『滌除三業門』)とのべる。このことをもって蕭子良は「十種慚愧門」および「極大慚愧門」の論文で、諸仏・父母・良友

などに対する〈慚愧〉を説くのである。

こうした六朝士大夫の生き方に対して、わが憶良はどうであろうか。まず、最初に気の付くことは、「竊以」という書き出しの文体である。これは「ヒソカニオモヒミルニ」と訓まれているのだが、こうした「竊以」という書き出しは当時慣用の冒頭形式であり、一つの文体であった。ただ、この文体は仏教文によく見受けられるものであり、そのことが「竊以」を用いた文章の内容を示唆しているように思われる。すなわち「ヒソカニオモヒミル」とは、深く自己を省察することを指し示す形式だということである。したがって、憶良が「竊以」という文体で始める文章は、自己省察へ向かうものであるということであり、そこには必然的に「我」の存在を深く問うということが行われる。

自己省察によって、憶良の一つには「罪」を意識する。すなわち、「沈痾自哀文」で「我胎生より今日に至るまで、みづから修善の志あり、曾て作惡の心無し……我何の罪を犯してか、この重き疾に遭へる。」というのである。そしてさらに「いまだ、過去に造る所の罪か、若し現前に犯す所の過なるかを知らず。罪過を犯すこと無くは何そこの病を獲むを謂ふ。」とも述べている。

このような自己省察によって認識されることは、この

世間における苦しみからの解脱と長生への願いである。憶良は自己をヒソカニオモイミル(自己省察)ことで、自らの犯した(入罪)を意識し、そして、長生への願いと世間の苦および無常を説いて自哀文を結ぶ。この後半における憶良の省察が「俗の道の、仮に合ひ即ち離れ、去り易く留まり難きを悲しび嘆ける詩一首并せて序」に続く問題である。

俗道仮合詩序の漢文序も「竊以」の文体で始まる。したがって、この文章も憶良が深く自己省察することによって記した序文であるということが窺える。ここで憶良はどのように自己を省察し、何を見出だそうとしたのか。その冒頭に積慈の教えと周孔の教えは二つだが「悟り」を得るのは一つであることを説いていることは先に見たとおりである。憶良がここで儒・仏一致を説いているのは、そのことにおける「法界」への教化と「邦国」の救済にあるが、その立場は六朝士大夫がそうであったごとく、士大夫たる憶良の標榜に他ならない。しかし、そのようであるといっても、人の世にあっては無常であり、死は免れ難いものであることを続いている。そのことへの悲嘆がこの序および詩のテーマであることが理解できる。ここに、儒・仏一致の考えと世間無常の考えとが憶良において繋がっていることに注目されよう。だが、

この繋がりは必ずしも明確な形を取っているわけではない。その繋がりはむしろ説明不足というべきであろう。ここで思い出されるのは、先の沈約の「均聖論」である。この論文で沈約は「内聖(仏教)と外聖(儒教)は義均しくして、理は一なり」とのべている。この儒教と仏教との一致は、周孔と釈迦の説く「慈悲」の等しさにあった。したがって、仏教の「三帰」「五戒」と儒教の「三綱」「五常」との一致は、基本はその慈悲の等しさを説くものだけといえよう。

それでは、儒・仏における慈悲の一致を説くことがどのようにして世間無常のテーマとかわるのであるか。そこで沈約は自己省察へと向かい、そして「捨身」ということを以って仏の「慈悲」を乞うのであった。つまり、それは自らの罪を悔い、世間の苦しみから逃れ平安な生涯を送りたいという願望からである。「捨身願疏」で「静かに念じ我を求むるに、時として得べきことなし。而してこの淪昏を積み生々として已まず、一念儼に値うも、時として得べきことなし。曾って未だ時を移さず障習相蕩す」とのべているのはそのことである。「我」が深い煩惱によって惑わされ、それゆえに懺悔によって仏に救いを求めるのが沈約であった。

この世間無常についてより深く省察を試みたのが蕭子

良である。蕭子良は先の『浄住子浄行法門』の「三界内苦門」において、

夫れ三界は牢獄にして四囲輪転す。在家出家未だ我
倒を断たず、免れ得る者無し。すでに生死の身に纏
うところとなる。心劳累なり、遷爰窮まり無し。こ
れ苦にあらざるは無し。故に、経に云う。三界皆苦
なり。

とのべて、人々が飲食・衣服・栄位などの楽しみとする
ところのものが〈苦〉となるものであることを説いて
「ゆえに大聖は三界の牢獄なるを觉察し、苦を知り、迷
わず、生死を解脱す」と結ぶのである。

ここに「三界」にあつてはすべて〈苦〉であり、どの
ような楽しみもないことを説くことによって「解脱」す
べきことを諭す。先にも蕭子良は人々に「慚愧」すべき
ことを諭したが、また「剋責」すべきことについても
「身は苦の本となり、自ら造るところにして生死の中に
集まる。……この故に特に須らく剋責すべし」（剋責身
心門『浄住子浄行法門』）という。こうした「慚愧」し
「剋責」すべきことを諭すのは、「三界」が〈苦〉の世界
だからである。その苦を逃れるために自らの犯した罪を
反省し「解脱」すべきだというのである。

したがって、蕭子良は続いて「出三界外楽門」（浄住

子浄行法門）を説く。すなわち、

仏世尊説く。三界世間は総てこれ苦なり。聚まるは
唯一苦のみにあらず、またこれ無常、無我、不浄に
して終に空に帰す。出世の外は則ち常楽あり。

且た説く。一苦は相に随い八あり。何をか八苦とい
う。所謂、生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨
憎会苦・求不得苦・五盛陰苦なり。一苦の中に更に
諸苦あり。

のごとくである。それゆえに、この三界世間の苦を逃れ
るためには「身命を捨て、衆生を憐愍せよ」「父母師長
聖賢を礼拝せよ」「光燈を以て供養し、人に施せ」「慈意
を以て衆生を視よ」「正浄を行い、医薬もて人を救え」
「慈仁を行い、衆生を杖うたざれ」「地を視て、行くに虫
命を踐まざれ」「有苦の衆生に扶接せよ」「浄心を以て善
人を供養せよ」「節食により上味は人に施せ」「法を説き、
衆生を引接せよ」といった浄行を諭したのであった。

このような浄行によって、三界世間からの〈苦〉を逃
れることが出来ると説くのが蕭子良である。ここには
〈衆生〉への強い関心があるように、衆生への慈悲が三
界世間苦から逃れる道だとするところに士大夫の生き方
が見出されるであろう。また、虫の命に対しても慈悲の
心を示すのは、衆生への慈悲と等しく、因果応報の考え

によつているのである。だから蕭子良は「善を語れば則ち人天の勝果、目驗に差別あり。惡を述べれば則ち三途の劇苦、皎然として虚にあらざ。而るに愚惑の夫は好んで疑異を起こし、多くの人天はこれ妄造、地獄は実説にあらざと言えり。……未來を論ずる無くんば、その事し難し。」〔沈寔地獄門〕『淨住子淨行法門』「夫れ因果の感応し影響の相生じるは、必然の道にして理として差舛なし。而るに衆生は業、行純ならず、善惡迭も用う。純ならざるを以ての故に報に精麤あり。或は賤、或は善、或は惡、その事迹一にあらざ。本行を了せず、故に疑惑を致す。」〔斷絶疑惑門〕同上のよ様に衆生に疑惑を断つべきことを説くのである。

こうして三界世間の苦と因果応報とが深くかかわることを以て、三界世間の苦をいかにして逃れるかが「出三界外樂門」のテーマであった。三界世間が牢獄のごとき〔苦〕の世界であること、それは車のごとく「輪轉」する因果応報の輪廻の世界であることによつて、衆生は「淨行」をなすべきことが説かれた。それは憶良が自哀文で「我胎生より今日に至るまでに、みづから修善の志あり、曾て作惡の心無し。（諸惡莫作、諸善奉行の教えを聞くを謂ふ）所以、三宝を礼拝して、日として勤めざる無く、（日毎に誦經し、發露懺悔するなり）」と述べているこ

と一つの考えであらう。

それでは、憶良はこのような「三界世間」の〔苦〕についてどのような考えを持つことが出来たのか。

四 三界世間苦と存亡の大期

ここで、憶良は「三界世間」をどのように捉えているのが問題となる。憶良は次のように述べている。

四生起滅 方夢皆空（四生の起き滅ぶことは、夢の皆空しきが方し）

三界漂流 喻環不息（三界の漂ひ流るることは、環の息まぬが喻し）

この「悼亡詩文」は、「蓋し聞く」とはじまり、冒頭にこの対の文を置く。続いて、そのことによつて維摩大士も釈迦能仁も泥沮の苦を逃れられなかつたという。それゆえ、二人の聖人ですら生死の變化を避けられず、三千世界の中では誰も死の暗黒のしのび寄ることからは逃れられないのだと知るのである。さらに人の世は、昼夜の二の鼠が争つて走り去り、目前を飛ぶ鳥が朝飛び去り、四大（地水火風）の身は争い侵し、間隙を過ぎる馬は夕べに走る、そのようなものであることを説く。そのことを以て紅顔の女性の死を悲しむのである。

こうした人間世界の無常のありかたをもっとも原理的

に説いたのが、先の対によって示された部分である。ここで憶良は、四生（胎生・卵生・湿生・化生）によって生ずるすべての生物の命が生まれそして滅びることは、夢のように空しいものであること、また、三つの世界に漂い流れることは、円環のように永遠に繰り返すときであることを聞くのだという。これは、すでに見た「三界内苦」の世界である。その三界内苦の死苦および愛別難苦がここでのテーマである。かかる三界内苦はここで死ということをして終息するときである。憶良はその詩において、

愛河の波浪は已先に滅え、苦海の煩惱も亦結ほることなし。

従来この穢土を厭離す。本願をもちて生を彼の淨刹に託せむ。
と詠むのである。

こうした三界内苦への激しい苦悶は、憶良において終生止むことはなかったといえる。青年態癡の死においても「敬みて態癡の為に其の志を述べたる歌に和へたる六首并せて序」、「伝へ聞く」こととして、

仮合之身易滅（仮合の身は滅び易し）
泡沫之命難駐（泡沫の命は駐め難し）

とのべて、やはり「千聖」も「百賢」も止どまらないこ

とを以て、まして凡愚の卑しい者にあつては死から逃れ去ることなど出来ないのだと嘆くのである。さらに、俗道仮合詩序の序文にあつては、

以（オモヒミルニ）

世無恒質 所以 陵谷更変（世に恒の質無し、所以、陵と谷と更に変わる）

人無定期 所以 寿夭不同（人に定まれる期無し、所以、寿と夭と同じからず）

というのも、同じ三界内苦の無常を説く原理から出発しているといえる。世の中には恒久の存在などというものは無いこと、だから陵と谷とが互いに変わるのであるといい、また、人には定まった生涯などというものは無いこと、だから、長生きする人あり、短命の人ありと同じではないことが説かれるのである。そして、先聖もすでに去り後賢も止どまっていけないこと、維摩大士も釈迦能仁もこの世にないことを繰り返す。

このような三界世間苦の原理をもう一度最後に繰り返し述べたのがこの序文の末尾である。ここではこのように結んでいる。

況乎（マンテヤ）

縦覚始終之恒数（縦し始終の恒数を覺るとも）

何慮存亡之大期（何を存亡の大期を慮らむ）

憶良は、結局生まれれば必ず死のあることを知るの
である。だから、もし死を願わないのなら生まれな
いが良いのだという。人は生死の変化を避けられず、命
には長命や短命があり、しかも、百年といっても瞬きの
あいだに過ぎ、ひじを伸ばす程の間に千年も空しく過ぎ
ることを以て、仮合の身を悲嘆するのだが、こうした三
界世間の苦へのもう一つの原理が「縦覚始終之恒数、何
慮存亡之大期」であると思われる。「始終の恒数を覚る」
とは、人に始めあれば終りありという恒の理を知ること
であろう。⁽¹⁰⁾ 憶良は「モン、仮ニ」それを知ったとしても
「存亡の大期」はどうして慮ることができようかとい
うのである。これだけは認知不可能であることを言ってい
るのである。「存亡の大期」は人智では知り得ないとい
うのである。

それはまさに「三界の漂流」を指し示すことではな
いか。先に蕭子良は「三界内苦」を説き、そして「出三
界外楽」を説いた。三界世間は車の輪転することく、生
死輪廻の世界だといっているのである。そこには生・老・病・
死などの苦が起滅し、無常の世界であると説いた。憶良
は「悼亡詩文」で四生の起滅は夢のように空しく、三界
の漂流は環のように永遠に繰り返すという無常の原理を
述べた。この文脈の流れにあるのが「縦覚始終之恒数、

何慮存亡之大期」であろう。現実世界において生きてい
る範囲のことは知り得るかも知れないが、しかし、それ
ですべてが終息するわけではない。「三界の漂流」すな
わち「輪廻転生」(生死輪廻)については、その「大期」
を知ることが不可能であるからである。⁽¹¹⁾

おそらく、こうした三界内苦と出三界外楽との激しい
葛藤を描いたのが次の「老いたる身に病を重ね、年を経
て辛苦み、及、児等を思へる歌七首」(巻五・八九七―
九〇三)であろう。この題では老苦・病苦を取り上げ、
児等への思いを詠もうとする。老苦も病苦も三界世間の
苦のありようだが、児等も解脱を障げる愛苦であること
は早くからの憶良のテーマであった。かかる苦を捉えて
その長歌においては、一層のこと死を選ぼうとするのだ
が愛する幼い児等を見るにつけ心は熱くなり、死ぬこと
すらできずに思い煩らい声を上げて泣くばかりだと歌う。
また、反歌でもそのような苦を歌うのだが、さらに愛す
る児等に粗末な衣服しか着せることができないのである
といつて貧窮の苦しさを嘆くことが加わっている。いわ
ば、この作品は老・病・死・貧・児等というさまざま
苦(三界世間苦)を取り込んだ作品であり、三界世間苦は
このようにしてあるという、憶良の総括として位置づけ
られた作品であろう。

ただ、憶良は三界内苦と出三界外楽との葛藤を繰り返しながら、この第二反歌でも詠むように、

術もなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど児らに障りぬ（八九九）

と、出三界外楽を求めながらも「児等」への愛によって三界内苦から逃れることはできなかった。それは、憶良が沈約や蕭子良といった六朝士大夫と決定的に異なった立場を見せる部分である。憶良は彼等のようにある明確な意志あるいは帰結を持つことはなかったのである。この場合も、意志的に憶良は児等を選んだのではない。児等という「障り」から逃れることができなかったのである。その姿はまた愛の苦へ沈淪する「感情」でもあるが、それ自身憶良のテーマであるとともに、衆生の姿でもあったといえよう。その衆生の姿こそ生・老・病・死の苦や貧苦さらには愛苦によって惑うところの「凡愚微者」である。憶良の姿はむしろ〈衆生〉としてのそれにあるように思われる。それが憶良の文学を確かにしているように思われるのである。

五 おわりに

憶良の作品を読むには暫定的な思想のモデルを必要とすると思われる。その思想は、憶良の時代（奈良朝初頭）

に最も先端的であった中国六朝思想である。それは儒仏道および老荘といったものの混然とした思想であるとともに、それらの激しい対立と論争、そしてそれらの合一であった。憶良はかかる思想状況を背景として東アジアの辺境に登場した作家であったと言えるからである。

六朝時代の思想を担ったのが六朝士大夫たちであったとすれば、憶良も彼等の思想を背景とするかぎり、憶良自身が士大夫たることは避けられない。ここに取り上げた六朝士大夫である梁の沈約や齊の蕭子良の思想をモデルとすることによっても、憶良の作品が六朝思想の中に映し出されることは確かであろう。

ここに取り上げた問題は、一見憶良の仏教思想のように見えるが、明らかに中国六朝思想によるものである。殊のほか蕭子良の思想は憶良を考えるのに示唆的である。ただ、憶良はそれを思想として受け入れたが、それがすべてであった訳ではない。沈約が〈捨身〉あるいは〈慈悲〉〈懺悔〉を以って、蕭子良が〈慚愧〉あるいは〈廻責〉を以ってその自らの意志を明らかにするのに対し、憶良はむしろ〈衆生〉の苦と惑いの二律背反の中に身を置いたのは、六朝士大夫の生き方とは決定的ともいえる相異を見せている。そこにこそ六朝思想を超えて孤立する憶良の文学の特異性を見出すべきであろうと思われる。

のである。

注

- 1 憶良と六朝思想との関係を説くものに、中西進氏「六朝風——旅人と憶良」(『万葉集の比較文学的研究』)および東茂美氏「六朝仏教からみた憶良歌の位置」(『上代文学』第五十四号)同「感情の理——六朝仏教と山上憶良——」(『国語と国文学』61年11月)がある。
- 2 『万葉集』の本文は、中西進氏の講談社文庫本『万葉集全訳注』による。
- 3 ここで「士大夫」と呼ぶのは、一般的に辞書で説明する「官職についている人。上流階級。貴族。読書人。知識人」などを範囲とする者を指す。謂わば貴族で官職に身を置く読書人といった人々である。
- 4 なお、『父母恩重経』と憶良の関係については、村山出氏「憶良——『世間苦』の文学における『子等』——」『万葉の歌びと』(万葉夏季大学)、増尾伸一郎氏「嘉摩三部作と道仏二教の父母恩重経——憶良作品の思想的基調をめぐって——」(『上代文学』第五十五号)に説かれている。増尾氏の論は詳細ですぐれている。
- 5 約字休文。吳興武康人。宗征虜將軍林子孫。孝建中為奉朝請。歴安西外兵參軍征西記室參軍。(中略)永元初遷左衛將軍。加通直散騎常侍。改冠軍將軍。司徒左長史。征虜將軍南清河太守。(中略)梁台建。為散騎常侍吏部尚書兼右僕射。及受禪。進尚書僕射。封建昌果侯。遷尚書左僕射兼領軍。加侍中。遭母憂。起為鎮軍將軍丹陽尹。進侍中右光祿大夫。領太子詹事揚州大中正。改尚左僕射。領中書令前將軍。遷尚書令。領太子少傅。軫左光祿大夫。加特進。天監十二年卒。年七十三。諡曰隱侯。有諡法十卷。四声一卷。晋書一百一十一卷。宋書一百卷。齊紀二十卷。高祖紀十四卷。宋世文章志三十卷。(中略)集鈔十卷。集一百一卷。(全梁文卷二十五)
- 6 子良字雲英。武帝第二子。昇明中授監朔將軍。歷邵陵王左軍參軍。軫主簿安南記參軍。遷安南長史。(中略)武帝即位。封竟陵郡王。歷鎮北將軍南徐州刺史。(中略)領尚書令。徙揚州刺史。加中書監鬱林王即位。進太傅。督南徐州。薨。諡文宣王。有集四十卷。(全齊文卷七)蕭子良の思想については、中嶋隆藏氏の「蕭子良の生活とその仏教理解」(『六朝思想の研究』)に教えられるところが多い。
- 7 講談社文庫『万葉集』注参照
- 8 例えは「竊以因縁仮有。衆生滯根。」(梁簡文帝「菩提樹頌」)「竊以易表含貞」(同「慈覺寺碑」)はその一例。
- 9 〈慚愧〉あるいは〈懺悔〉について、井村哲夫氏は河原寺仏堂の倭琴に書きつけてあったという二首(巻十六・三八四九・三八五〇)の中に敬虔な懺愧と懺悔の姿を見ている(『万葉びとの祈り——現世安穩・後生善処——』『上代文学』第五十九号)。また、中西進氏は「貧窮問答歌」

の中に、俗にあることの貧を慚愧する『靈異記』の作者景戒の心と等しいもののあることを指摘している（『貧窮問答歌』『山上憶良』）。

井村哲夫氏『万葉集全注』巻五

憶良は老身重病の歌の冒頭に「たまきはる 現の限は」と詠んで、その注に「瞻浮州の人の寿の一百二十年なるを謂ふ」と書いている。現世の人間の寿命の最も長い場合を指すのであり、これは自哀文にも見えている。この肉体の限度を説くものに李善注『文選』の「養生論」（嵇叔夜）注に見える「天老養生經老子曰人生大期以百二十年為限」がある。この「人生大期」（「期」は百年の限り。百二十年の人寿だから「大期」という）。が「始終の恒数」に相当するといえる。それゆえ、「人生の大期」に対するもう一つの大期が「存亡の大期」であって、輪廻転生（生死輪廻）の大期（この「大期」は、芳賀紀雄氏の「理と情——憶良の相剋——」『万葉集研究』第二集に説くように、「大いなるさだめ」と考えられる。）を指すといえよう。

補記

この小論は一九八七年十一月十四日に行われた上代文学会シンポジウム「憶良を読む」を骨子として補筆したものである。